

## 連句へのお誘い

未全

### (一)

俳句はいまや流行過剰なほどだが、そのわりに連句は知られていない。僕もさほど詳しいわけではないが、おもしろいのでお誘いをする。なお、「俳句」は「俳諧の発句」の略で案外新しいらしく、正岡子規の案と聞く。

連歌とは、五七五の長句に七七の短句を添え、その短句に別の長句を添え、次々に和歌らしいものを組み立ててゆく芸術、あるいはむしろ遊びである。その歴史は『新古今和歌集』から『万葉集』にまで遡られるが、時代と共に煩雑な規則が増え、室町時代の終わりには本式連歌への手引きとして、略式の「俳諧之連歌」が生まれた。また「俳諧」、「連句」ともいう。俳諧とはもと「おどけ」「滑稽」の意味である。

俳諧はその後、西山宗因（一六〇五—一六八二）によつて、しゃれや艶笑で句をつなぐ知的遊びとして一世を風靡し（談林派）、若き日の井原西鶴（一六四二—一六八三）や松尾芭蕉（一六四四—一六八四）もその門に入る。西鶴はやがて小説に転じ、芭蕉は俳諧の「この一筋に」つながって、それを高度の芸術にまで高めた。

芭蕉は四十歳までに談林派の宗匠としてかなりの声望を得ていたが、四十の時江戸で大火に遭い、故郷伊賀では母を亡くすなど、人生の無常に目覚めて、故郷や奥の細道など多くの旅に出た。「西行の和歌における、宗祇の連歌における、雪舟の絵における、利休が茶における、その貫通するものは一なり」として、連句を同じ水準の芸術

と見たのもこのときである（『笈おひの小文』）。旅の途上、作風を二変三変しながら多くの弟子を育て、五十の時大坂で病歿した。その間の十年、一旦、古典芸術の高みに近づきながら（『猿蓑ざるみの』）、敢えて一転して世俗的瑣事さじの中に美的価値を求めて前進した（『炭俵』）。その間の十年の飛躍の高さは、世界的に見て稀である。

主著『芭蕉七部集』（岩波文庫）は四十歳以後の、名古屋（『冬の日』、『春の日』）、江戸（『暖野』）、京都（『ひさご』、『猿蓑』）、江戸（『炭俵』、『続猿蓑』）での七篇で、各篇の選択、編集、出版は芭蕉や直弟子のもの丈ではない。中村俊定『芭蕉の連句を読む』（岩波）、暉峻康隆てるおかやすたか『芭蕉の俳諧（上下）』（中公新書）などの優れた解説書がある。

連歌の「付句」の数の標準は百（「百韻」）だが、蕉風ではやや簡略化されて三十六句（「歌仙」）が多く用いられた。これを数人の「連衆」で「巻く」、つまり組み立てるのである。もちろん一人遊びも可能でそれは「独吟」と言うが、なかなかうまくゆかない。それは一人の人間の棲む世界が限られていて、想像力の限りを動員しても、描きうる世界が同語反復的で平板になるからである。現に芭蕉の周辺の作品として残された独吟の例は知らないが、その反面、ある句にいくつかの付句つけくをあらかじめ案じておくことは、芭蕉自身にもその例がある。ほんの一例として、

いのち嬉しき撰集のさた 去来

さまざまに品かはりたる恋をして 凡兆

浮世の果は皆小町なり 芭蕉

がある。この芭蕉の句は、「折りがあれば使いたい」と考えていたものようで、彼はこの時、弟子に付句つけくについて話している。次回はこの件から解説しよう。

前回は『猿蓑』の第二歌仙から三句を取った。

- (30) いのち嬉しき撰集のさた 去来  
(31) さまざまに品かはりたる恋をして 凡兆  
(32) 浮き世の果は皆小町なり 芭蕉

(30)はそれ以前の句の運びから、西行のような歌僧を連想したものと見られている。去来は最初、西行が源頼朝に和歌のことを訊かれ、「和歌の奥義は知らず候」と答えたという故事を連想して、そのまま付け句にしたが、芭蕉から「その連想はよい。だが西行に決めたのでは、事が確定し過ぎて先が続けにくい」との注意を受け、このように西行の「倂おもかけ」を取ったという。

(31)はその倂の人の恋の遍歴だが、この二つを一对にすると一幅の絵が浮かぶ。これが連句である。

これに対して(32)は芭蕉が前以て用意していたものというのは前回に述べたが、この小町は晩年の落魄らくはく後のことで、(31)とのつながりには人生の哀愁が漂う。

ここまでに西行や小町がだが、それは偶然の成り行きで、初めからこの主題を入れねばならぬという決まりはない。連句は要するに連衆(参加者)が助け合って一卷を巻く遊びなのである。歌仙一卷は所詮このような連想遊びに過ぎないが、連衆の競争でなく調和の努力は大切である。それが連句の大きな文化的特色である。

次に右の歌仙を逐一解説しつつ、その規則の説明を試みよう。歌仙一卷の内、初めの六句を「初折表しよわりおもて」、次の十二句を「初折裏」と呼ぶ。次の十二句と六句が「名残折表なごり」と「同裏」である。また第一句は「発句ほっく」で、今と同様、切れ字と季節が必要である。第二句は「脇」と呼ばれ、季は発句に従い、発句と穏やかにつながる事が求め

られる。以下「第三」から、上記のような連想の転換が始まるわけである。一卷の最終を「揚句あげく」という。

ここで大切なのは一卷の中に大事な句を配置する規則である。特に花と月は場所が決まっており（「定座」）。花月を始め春秋の句が出ると同季を二三句続け、夏冬は原則一句とする。また人生の華である恋は場所の指定こそないが、(31)や(32)のように二三句続ける決まりである。

この歌仙の「初表」は次の通りである。

- |     |   |    |
|-----|---|----|
| (1) | 市中 <small>まちなか</small> は物のにほひや夏の月                 | 凡兆 |
| (2) | あつしあつしと門 <small>かど</small> かどの声                   | 芭蕉 |
| (3) | 二番草取りも果さず穂 <small>い</small> に出て                   | 去来 |
| (4) | 灰うち叩くうるめ一枚  | 凡兆 |
| (5) | 此筋は銀 <small>かね</small> も見知らず不自由さよ                 | 芭蕉 |
| (6) | ただとひようしに長き脇 <small>わき</small> 指 <small>さし</small> | 去来 |

(1)の切れ字は「や」、季は夏、従って脇も夏、この(1)と(2)の景色は町中らしいのに、(2)と(3)では田園風景に変わり、田植え後の二度目の草刈りも終わらぬ内に稲の穂がでるといふ暑さが描かれる（夏が三句続くのは異例）。なお「第三」はこのように「て」で止める例が多い。

(4)～(6)は無季、(5)は「月の定座」の一つだが、月は今回、発句ほくに「引き上げ」られている。うるめ鱒いわしは粗末な食事、銀は京大坂や江戸は別として、当時まだ使われていないのに、異常に長い脇差という無粋な滑稽。

連句の本当の味が出るのは、神祇じんぎ・釈教しゃくぎょう・恋無常れんむじょうが解禁された「初折裏」からである。

その説明のために物理学者寺田寅彦の『連句雑俎ぜんそ』を取り上げたい。それによると、句Aを見て直ぐ連想される景色Bを次の句に仕立てると、だいたいは「付けすぎ」になり平板だし、その先にどんな情景Cを付けるべきかがうまく行かない。Bから連想されるB'、またはB'からの連想B''を取るのがよい、という説である。

連句の付け句の法には古来いろいろの議論があるが、僕ももっぱらこの方法によっている。例えば(2)に氷水を付けたのでは同様の夏景色ばかりで平板に過ぎよう。歌仙はこの意味で、人生の種々相を巧みに切り取り、それを微妙につなげてみせるものと言っても良い。

「名残折表」の十二句を挙げる。

- |      |   |    |
|------|---|----|
| (7)  | 草村に蛙 <small>かはず</small> こはがる夕まぐれ  | 凡兆 |
| (8)  | 露 <small>ふき</small> の芽とりに行燈 <small>あんど</small> ゆりけす   | 芭蕉 |
| (9)  | 道心のおこりは花のつぼむ時   | 去来 |
| (10) | 能登の七尾の冬は住うき   | 凡兆 |
| (11) | 魚の骨しはふる迄の老を見て   | 芭蕉 |
| (12) | 待 <small>まち</small> 人 <small>ひと</small> 入 <small>いり</small> し小御門 <small>こみかど</small> の鑑 <small>かぎ</small> | 去来 |
| (13) | 立ちかかり屏風を倒す女子 <small>おなご</small> 共 <small>ども</small>   | 凡兆 |
| (14) | 湯殿は竹の簀 <small>すの</small> 子 <small>こ</small> 侘 <small>わび</small> しき  | 芭蕉 |
| (15) | 茴 <small>うい</small> 香 <small>ききょう</small> の実を吹落す夕嵐  | 去来 |
| (16) | 僧 <small>そう</small> やや寒く寺にかへるか  | 凡兆 |

場所の制約から、丁寧な解説は中村俊定『芭蕉の連句を読む』等にゆだねて、以下は略解である。

(7)は長脇指の男の意外な臆病さ、(8)は例えば局しほねの女の振る舞いであろう。(9)で、なぜ道心がでるのか、中村氏は行燈あんどんの火の消えたのからの連想としているが、この程度の想念の飛躍は許されるのである。

(10)で能登の七尾がでるのも、中村氏によれば、西行への芭蕉の傾倒に応えたもので、道心の人のおもかげ佛である。(11)の「しはぶる」は「しやぶる」で、(10)の風景に棲む別の人物を配したものである。

(12)、(13)は『源氏物語』(末摘花すえつひばな)の翻案で、物語の一節を取って、(10)の人を門番の翁としたものか、(13)が(12)につながるのは宮廷生活だが、(14)に続くときには、離れて旅籠はたじの湯殿などを想像したらしい。

裏の五六句目に月の、十一句目に花の定座があるが、(9)に「花」がある等の事情でまた例外である。この連句には例外が多く、事例には不向きだったかもしれない。

しかし、以上では付け味がよいか悪いか、独りよがりか否か等は、よく分からない。このような問いに答えがあるかも問題だが、この解説は次回にしましょう。

### (三)

『猿蓑』の第三連句の前半の解説を終えるはずでしたが、お詫びが二つあります。一つは前半の最後の二句を落とした事、次は上野洋三『芭蕉七部集』(一九九二年岩波セミナーブックス)の出版を知らず、伝統的な「去嫌さりきらひ」の心得を軽視したことです。ただし今の所、間違いは書いていませんが慙愧です。

前回の脱落は

- (17) さる引きの猿と世を経る秋の月 芭蕉  
 (18) 年に一斗の地ち子はかる也 去来

この初折り裏は花の定座だが、初表(3)で花が出たので、変わりに月を出したか。(18)の地子は猿引きの地代、ここからが名残の折りです。

- (1) 五六本生木つけたる 溜みずたまり 凡兆  
 (2) 足袋ふみよごす黒ぼこの道 芭蕉  
 (3) 追たてて早き御馬おんまの刀持かたなもち 去来  
 (4) でつちが荷ふ水こぼしたり 凡兆  
 (5) 戸障子しやうじもむしろがこひの売屋敷 芭蕉  
 (6) てんじやうまもりいつか色づく 去来

(1)(2)は道路の有様、その悪い道を殿様の家来が傍若無人に走る。(4)はその間の滑稽模様。(5)は一転して売り屋敷を出す、僕は(6)の「天井守り」を魔よけのお札かと考えていた。実は唐辛子の下げたものだったが、素人の鑑賞にはまあ良しとするか。

- (7) こそこそと草鞋わらぢを作る月夜さし 凡兆  
 (8) 蚤のみをふるいに起きし初秋 芭蕉

- (9) そのままにころび落ちたる升落おとし 去来  
 (10) ゆがみて蓋のあはぬ半櫃びら 凡兆  
 (11) 草庵そうあんに暫しばらく居ては打やぶり 芭蕉  
 (12) いのち嬉しき撰集のさた 去来

これで「名残表」が終わる。(9)の升落しは鼠取りで、(10)の雰囲氣と合う。これを一所不在の西行の境涯と転換し、(11)、(12)とつながる。

- (1) 名ウさまさまに品かはりたる恋をして 凡兆  
 (2) 浮世ウの果は皆小町なり 芭蕉

が続く。ウ(2)は芭蕉が場所あらば、と思案していた付け句である。芭蕉の付け句の妙は(5)、(11)でもよく分かるが、凡兆、去来の付け味もなかなかうまい。

- (3) なウに故ぞ粥かゆするにも涙ぐみ 去来  
 (4) 御留守ウとなれば広き板敷 凡兆  
 (5) 手ウのひらに虱しらみ這わする花のかげ 芭蕉  
 (6) かすみうごかぬ昼のねむたさ 去来



ところで「去嫌いらいけん」というのは、もう少し古い俳諧で重要視された法式で、俳言はいごん一つ一つに季語の他、旅、神祇じんぎ、釈教しやくきやうなどの分類を施し、例えば旅は「三句去さき」「句数一〜三」とされていて、一度旅が終ると三句以上は出せないが終わるまで、一〜三句は続けられるという種類の規則です。その使い方は上野氏の本で分かります。

#### (四)

前回で連句の解説は一応終えた。少々ポイントが甘かったが、こんどはこの「お誘い」が俳句のお誘いにもなることを期待して書くことにしよう。

実は前回の上野洋三『芭蕉七部集』は、僕の連句の知識に大きな穴のあることを教えてくれた。それを知らずに組み立てた旧作を凶々しく引用するが、その点をチェックをしながら穴を埋めたいのである。

平安時代に始まる古典連歌が、戦国時代になって俳諧連歌を生み出したが、当初は古典連歌への練習台のようなものだった。そして古典と俳諧の第一の差は、前者が「雅語」を連ねるのに対して後者が「俳言はいごん」を用いるという点にあり、それぞれの「意味づけ」に添って一巻が巻かれるのであった。ただ意味づけも問題だが、「俳言」は俗語や漢語の意味というのはいいが、「さつき雨」は雅語だが、「さつきの雨」は俳言、というような微妙な区別もあり、先ず俳言はいごんの定義がはっきりしないのが困る。これを論ずるのは厄介だが、言葉を分類し、それらの間にある関係を付けるといふ型の規則書が、芭蕉の頃にも多数出ていた。例えば、ある本では

- (1) 神祇、(2) 釈教、(3) 恋、(4) 哀傷、(5) 述懐、(6) 人倫、
- (7) 居所、(8) 衣類……(24) 支躰……以下、
- (29) 食物、(30) 名所、(31) 国。

など分類されており、同類の句が何句まで続けられるか(句数)、また一旦やめたら何句の間同類は出せないか

「去嫌こけん」が分かるようになっていた。例えば夏冬の句は一三句、春秋の句は三五句続けられるが、一旦打ち切ると五句は「去る」ことになり、一方、恋は二五句は続けられるが、一旦打ち切ると三句去りとなる、我々もこの辺までは知っていたのだが、大多数の言葉に句数、去嫌こけんのあることは知らなかったのである。

この件に注意しつつ東独にいた頃の作（一九九〇）を見る。

ワイマールにて

初表

- (1) 暮れなずむ古き都や春の雨
- (2) ゲーテ、シラーの像の青草
- (3) 絵にならぬ絵とは知りつつ筆とりて
- (4) 槓の木高く秋の深まる
- (5) 欠けそめの月に築地の続く道
- (6) うしろ姿は清き白髪

(1)の春の雨、(2)の青草は俳言か雅言か？ 春の句数は三五句と言うのに対して二句は少ないが、これは許されるのか。この種のことは、(3)、(4)句はもとより、(5)の築地「居所」、(6)の白髪「支躰」などにも影響がある。『冬の日』の頃から俳言のない俳諧が盛んになり、去嫌への拘泥が減って、それが蕉風の確立につながる、(4)の槓と(5)の築地などには「にほひ」や「位」に通うものがあるつもりだがどうか。

初裏

- (1) 演歌師のギター手あかに古びたる

- (2) ものの香りのしみし壁板
- (3) 人去りて心おちいぬ控の間
- (4) わが一代の真価問うとき
- (5) 颯ひょうとして雲飛ぶ山の巔いただきに
- (6) 廢墟をむごく照らし出す月
- (7) 初秋の百物語なお果てず
- (8) かわやのあたり曼珠沙華さく
- (9) すれちがう汽車を待つ間の銀煙管きせる
- (10) どちらからかと人の問い寄る
- (11) まだ早き花の席とるござまもり
- (12) またも入試に落ちし長男

表(5)の築地と裏(2)の壁板は共に「居所」だろうが、一旦切ると、本当は「三句去さり」なのに、実際は二句で、去嫌さりきらいの規則に違反している。但し僕は蕉風の「響き」、「におい」等の付け味に関心があるので、以上で去嫌への言及は一応やめ、普通の付けつけあいに補足的にふれよう。

(4)と(5)に一種の「響き」を感じないだろうか。(7)の怪談に(8)の曼珠沙華を呼び出し、(9)の見慣れぬ乗客に、人が声を掛ける。この辺りにはそれぞれ一幅の絵がある。

### 名表

- (1) 茅葺きの家を今日まで守りこし

- (2) すす払う間も唱う念仏  
 (3) 誰も来ぬことよいのやら悪いやら  
 (4) 寝顔に恋の果てを知りそめ  
 (5) しどけなき紅の孀<sup>じゆばん</sup>の乱れかご  
 (6) 新<sup>しん</sup>内<sup>ない</sup>流<sup>りゅう</sup>し深川の夜  
 (7) 救急の車の音も遠のきて  
 (8) 筆は進まず締め切りは明日  
 (9) 一つ蚊に大の男の空<sup>から</sup>踊り  
 (10) 壁のとなりは何の騒ぎぞ  
 (11) 月見ゆる気は更になきこの宵に  
 (12) 雨は巴<sup>は</sup>山<sup>ざん</sup>の秋に極まる

な詩、李商隱の『夜雨寄北』を踏まえたものである。(3)は(2)の人物と何となく通い合えばいいが、案外難しい。(4)、(5)、(6)と恋、(6)は余情である。(12)の巴<sup>は</sup>山<sup>ざん</sup>は、好き

- (1) 白<sup>名裏</sup>鳥の折々立つる羽の音  
 (2) 氷ばかりの続く海づら  
 (3) 板囲い丸木鳥居<sup>やしろ</sup>の社<sup>やしろ</sup>にて  
 (4) 思いもかけぬ巫<sup>み</sup>女<sup>こ</sup>の緋<sup>ひ</sup>袴<sup>ばかま</sup>

- (5) 来てみれば花は蕾つぼみのままながら  
 (6) 草柔らかき春のくれがた

表の(1)と裏の(5)は、久々の月、花の定座である。特に名残なごりは最後の一对まで定座がなく、表現への制約が乏しいだけその表現に自由を与えている。

右で、俳言はいごんが『冬の日』の頃から目立たなくなつたことにふれたが、去嫌さしきらひも同様で、その頃から現れた蕉風しやうふうの付け味つけみ(にほひ、響きなど)は人工的な意味の差などからより高く出て、高雅の世界を目指している。今回は略すが、この変化は芭蕉の大きな力である。

もう一言加えるとすれば、芭蕉の転換の大きさは、方面こそ違え、一流の数学者や哲学者の、慣習を超えた創造力の飛躍を思い起こさせる。

- 
- 社会福祉法人新生会 『こかげ』 第四九〜五一号（二〇〇六年十二月〜二〇〇七年二月） 所載
  - PDF化には $\text{\LaTeX}$ 2<sub>ε</sub>でタイプセッティングを行い、`dvipdfmx`を使用した。

村田全氏のその他の著作については、

科学の古典文献の電子図書館 「科学図書館」

<http://www.cam.hi-ho.ne.jp/munehiro/sciencelib.html>

に収録してあります。

「科学図書館」に新しく収録した文献の案内、その他「科学図書館」に関する意見などは、

「科学図書館掲示板」

<http://6325.teacup.com/munehiromeda/bbs>

を御覧いただくか、書き込みください。